

夏の美術館での過ごし方 「ゴードン・マッタークラーク展」関連プログラム報告

荒井美月

「やってみようフォトグリフス」

七月下旬、企画展示室の出口付近（二階 エントランス）には「やってみようフォトグリフス」と題したワークショップコーナーが設置された。この場所では、マッタークラークの作品《グラフィティ・フォトグリフス》「註1」をモチーフとした用紙に、カラーペンで色付けをすることで彼の作品制作を追体験することができる「図1」。誰もが自由に立ち寄ることのできるフリースペースで、年齢や国籍を問わず、多様な来館者で賑わう様子が見られた。



図1 「やってみようフォトグリフス」

を施したモノクロ写真のシリーズである。ぬり絵のように、目立った線や形をなぞったり塗り潰すことで、気にも留めていなかったユニークな線や記号を発見することができる。そこに新たな記号や文字を描き加えるのも良い。一から描き始めることよりもハードルの低い取り組み易さが好評なようだった。仕上がった用紙は、展示室内でも使用されていたフェンスに掲出され、開催期間中はエントランスの一角が彩られていた「図2」。このスペースは、展示室内の内と外を緩やかに繋ぐ役割を担いながら、多様な来館者に開かれた空間だった。



図2 完成した「やってみようフォトグリフス」

「夏休み！こども美術館」
八月には、例年、夏の時期に合わせて実施している小学生向けプログラムを行った。この時期のプログラムでは、主に展示室内での鑑賞活動と、工作活動とを組み合わせた内容を継続している。今夏は、小学生の美術教育に造詣が深い柴崎裕先生（聖学院大学 特任教授）、辻政博先生（帝京大学教授）監修のもと、「①ゴードン・マッタークラーク展を鑑賞し、この期間にしか出会えない空間を味わうこと」「②鑑賞体験に繋がるような工作活動を盛り込み、鑑賞と表現の両面から楽しめるプログラムを目指すこと」を目的とし、企画展に関連したプログラムを行った「註2」。実施した二日間の



図3 《スプリッツィング：四つの角》を鑑賞している様子

参加者は、小学一年生から四年生までの九十一名。プログラムでは、参加者を年齢別の二グループに分けて進行し、各グループにはガイドスタッフ（当館解説ボランティア）が数名ずつ付いて、子どもたちのサポート役を担った。ここからは当日の流れを紹介していきたい。

来館した参加者は、まず「やってみようフォトグリフス」に取り組みながら開始時刻を待つ。マッタークラークの世界へと少しずつ浸っていく時間だ。続々と参加者が集合し開始時刻になると、スタッフが登場。進行役であるファシリテーターを務めたのは、「しばちゃん先生（柴崎先生）」と「ひつじ先生（辻先生）」だ。各グループごとに、美術館での約束事やマッタークラークについてのお話を聞いたところで、いよいよ企画展示室へと向かう。どちらのグループも《スプリッツィング：四つの角》、《オフィス・バロック》模型（縮尺1：8）、《日の終わり》の三作品を鑑賞した「図3」。マッタークラークが穴をあけた建物の写真や模型、切断された実物をじっくり観察しながら、発見したことや想像したこと、考えたことを話し合ったり鑑賞を深めていく。「作家はどんな気持ちだったのか」「切断された建物に住んでいた人（あるいは活用していた人）はどんな人物なのか」「そこはどんな場所なのか」と、対話を通して様々に思いを巡らせてつつ、他者の意見にも耳を傾けることで、自分ひとりでは気が付かなかった発見が次々と浮かび上がってくる。近くで見学をしていた保護者

にとつても、子どもたちの多様な感じ方を
知る機会となり、貴重な時間となったよ
うだ。

作品鑑賞を終えたら、今度は子どもた

ち自身が作家となる番。マッタークラーク
がしたように、家の形ともとれる箱に好き
な形の穴をあけてスコープを制作した。少
し硬い箱に苦戦しながらも、道具の使い
方を工夫して、思い思いの穴を切り抜い
ていく。時折、実際に覗いて見え方を確
認すると、穴の形にトリミングされた景色
に心が弾む。穴から入り込む光と影の動
きにも興味津々で、想像力が掻き立てら
れたようだ[図4、5]。「ここは〇〇な家だ
と思う」「〇〇な場所にあるから屋根の形
は丸くしたい」「覗いた世界には、いつも
虹がかかる家がいい」といくつもの物語が
一気に膨らんでいく。想像した世界を具
現化するべく、色とりどりの画用紙やマス



図4 スコープの見え方を確認



図5 スコープの内部に光と影の不思議な模様が浮かび上がる



図6 画用紙やテープでスコープを装飾中



図7 親子で撮影中



図8 スコープから覗いた景色を鑑賞

キングテープを使い、一層の創作に励んで
いた[図6]。たった三十分間の作業時間にも
もかわらず、個性あふれる素敵なスコー
プが仕上がった。

スコープが完成したら、そのスコープを
使ってお気に入りの風景を探しに行く。
何気ない風景でも、スコープを通して見て
みると、見え方が変わり様々な発見や驚
きがあったようだ。保護者とともに、ス
コープから見える世界に惹き込まれてい
く。とっておきの場所を見つけたら、
スコープの覗き窓にスマートフォンをあ
て、スコープから覗いて見える景色を写真
に収めていった[図7]。納得のいく写真が
撮れるようにと、保護者とコミュニケー
ションをとりながら試行錯誤していた姿
は何とも微笑ましい。それまで硬い面持
ちで参加していた子どもたちも、安心し
きった表情で活動する姿が印象的だった。

写真撮影を終えたら、複数枚の中から
一枚だけを厳選し、事前に指定していた
メールアドレスへと送信する。保護者から
送信された写真は、即座に館内の壁に投
影され、それを参加者全員で鑑賞しなが
ら活動の振り返りを行った[図8]。作品
を観たこと、作業したこと、写真を撮った
こと。改めて活動を振り返ることで、子
どもたちの中でも一連の活動が結びつい
たようだ。スコープから覗いた景色にも個性
が表れており、子どもたちの鋭い視点が
各所に感じられる機会となった。

実施後に行なった参加者アンケートにお
いて「これまでに美術館・博物館の子ども
向けプログラムに参加したことがあるか」
という問いでは、今回が初めてだという参
加者と、参加経験のある参加者とが約半
数ずつ混在していたことが分かった。ま
た、プログラムが楽しかったかどうかを尋

ねる問いでは、「すごく楽しかった」「楽し
かった」という声が九割を超えていた。こ
のことから、今回のプログラムは同様にプロ
グラムの参加経験値にかかわらず、満足度
の高い内容を提供できたと言えるだろう。
加えて、「また機会があれば参加したい」
「定期的に開催してほしい」といった意見
も複数見られたことから、こういったプロ
グラムへの期待値の高さがうかがえる。今
後も引き続き、充実した機会を提供して
いければと思う。

(企画課研究補佐員)

註

1 「フォトグリフス(Photoglyphs)」は、「写真
(photo)」と「絵文字、記号(glyph)」を組み合
せた、ゴードン・マッタークラークによる造語。
2 八月十八日、十九日の二日間、各日二回ず
つ実施。参加者は各回定員三十名(事前申込み、
抽選制)。三〇二名からの応募があった。